医療人類学
27APR2012
2 班

胃ろうはエイリアンか[配布資料]

石原幹事長

「意識がない人に管を入れて生かしている。何十人も寝ている部屋を見せてもらったときに何を思ったかというとエイリアンだ。人間に寄生しているエイリアンが人間を食べて生きているみたいだ。」（朝日新聞 2012 年 2 月 8 日）

鈴木医師

「大部屋に並ぶ胃ろう患者を見て違和感を感じた。本当にいいのか。」

映画『エイリアン』

1979 年公開のアメリカ映画。宇宙船の乗組員が未知の惑星で蜘蛛のような生物に取り付かれる。その後、乗組員の中で成長した寄生生物が体を食い破って外に飛び出し、乗組員たちと戦う。

「体内の蛇」

内田樹によると、映画『エイリアン』はヨーロッパ全域で流布している「体内の蛇」という民間説話をなぞったものである。「体内の蛇」は、女性が不注意により蛇の卵を飲み込み、体内で成長した蛇が食道をせりあがって女性を窒息死させるという話。（wikipedia「エイリアン」の項、初出はハロルド・シェクター『体内の蛇　フォークロアと大衆芸術』）

「蛇婿入り」

娘の機の音が毎日しばらくの間やむので母が部屋をのぞくと、蛇が娘の顔をなめていて、娘は居眠りをしている。娘が相手を侍のつもりでいるので、母親は糸をつけた針を侍の頭へ刺すように命じ、娘がそのようにすると蛇は去る。母は糸をたどって行き、穴の中で蛇がうなり、「親の言うことを聞かないから、命を落とす」「身代りをたくさん作っておいたから、死んでも心配ない」「人間は賢いので、よもぎと菖蒲を煎じて飲めば子供は落ちる」と会話しているのを聞く。もどって煎じたものを娘に飲ませると、蛇の子がたくさん生まれた。　（『日本昔話通観９』　）

エンバーミングとゾンビ映画

藤井正雄氏によると、「死体の大部分に対してエンバーミングを施して生きているような状態で土葬をする」というアメリカの文化がゾンビ的想像力を生むために、アメリカではゾンビ映画が多数製作されているという。また、エンバーミングの背景にある「永遠の命の希求」は同時に臓器移植を肯定しやすいと言われている。（波平恵美子『医療人類学入門』p.56）

腹の重視

日本人の言語表現に、自分の感情に言及するのに腹痛にかかわるものが多く見いだせることから、腹部とは何か感情と連動するイメージとしてとらえられているのではないかと考えることができる。「日本人にとって腹は思想とともに感情の宿るところであり、知性とともに情愛が蓄え込まれている場所である。」（波平恵美子『医療人類学入門』p.21）